
そして夜明け

K+

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

そして夜明け

【Nコード】

N3184BA

【作者名】

K+

【あらすじ】

病がちの父と異母弟に薬を買う為、リイリの王女は国を出る。半年後に成人を迎えれば従弟との婚約が待つ身。生涯一度の自由を求めた彼女の旅は、出会いを経て、母国の行く末も変えていく。暁を目指した一作。※六暦211（-625）年

城の一室に、淡く日の光が差し込んでいる。

傍らで低く紡がれる講義に、丹亜・シャラ・リイリは欠伸を噛み殺していた。

「――そして我が国の前身たる緑の国は、六割を譲渡したのであります」

本年七十歳を迎えた老師は一旦、口を閉ざす。赤錆び色の双眸が、じろりとこちらを見た。「何か、御質問は」

「ありませぬ」

師は、嘆かわしいと言いたげな目をした。

「六割ですぞ。国土の半数以上をルウに委ねた御先祖のお考えに、興味は無いのですか」

「興味は既に。巻物庫にて記録を読んだ故、建国の祖のお考えは解っているつもりです」

「されば、かの決断について殿下のお考えをお聞きたいですな」

「わたくしに聞いたところで何とする。ルウと七賢者によって六暦は始まり、二百年もの間、平和を享受し、今に至る」

丹亜は口早に応じた。「つまりは正しかった。わたくしの考えなど、どうでも良くはないですか」

「狭まったといえども残された王国を受け継がれている方々には、一考いただく必要がございます」

莫迦莫迦しい、とぼやきたいのを丹亜はこらえた。

丹亜は現国王の第一子ではあるが、女性の為、王位継承権は無いも同然らしい。

つい最近になって知ったのだ。

ずっとリイリ王国では長子が後を継いでいて、性別で継承権の有無が生じるなど思ってもみなかった。

宰相を務めている叔父の話では、これまでたまたま第一子が男性

だったので、そのまま継承されていただけらしい。

すぐに巻物庫で系図を確かめた。三代目は女兒が第一子だったが二歳で死去している。その後は、男児、男児、男児……

十七代目の父まで一〇三人目が男子続き。

継承権について書かれたのは、三代目の頃にしたためられた物だけ。表現が曖昧だった。

【父祖、エイリ・リイリの血を引く者が王となる。】

叔父が言うには？王？であるからして、男子にのみ継承権は生じるそう。

四十五歳になる父王は宰相と協力して善政を布いているが、やや身体が弱い。

それもあった、丹亜は国を背負うべく懸命に学んできた。もう半年で成人を迎えるに当たり、一層気を引き締めていたのに。

叔父の言う通りなら、王位継承権の筆頭は弱冠五歳の異母弟（まことい）にある。

異母弟
末呉羅は、父に似たのか病弱だ。

花冷えに又も風邪をひいたそうで、この講義が終わったら見舞いに行くつもりだ。

御覧ください、と老師は机上に大陸全土の古地図を広げた。

現在の大陸より円に近い。今は南西で島になってしまっている風の国が、しっかりと陸続きだ。

師の節くれて皺だらけの指が、大陸中央に楕円を描く緑の国を示し、その西に当たる上下二国に移る。

「かつて緑の国は、サージソート王国やヴィンラ島と同じ程の領土だったのです。サージソートの前身である水の国も領土は譲渡しておりますが、その割合は一割ほど。僅かなものです。当時、三カ国の国力は拮抗しており、緑の国だけが六割も譲渡する必要性はありませんでした」

「史実には尤もらしく書かれているけど、実際のところはシセをルウと取り合った挙句、負けて自棄になったんじゃないかしらね」

投げやりに丹亜が言うと、老師は再び、嘆かわしい、と言いたげな目をした。机に立てかけていた杖を手にして、薄い敷物越しに床をこつこつ叩く。

「恒久平和を求め、ルウを見込んで譲渡された。正に英断です」

「国土は広過ぎない方が治め易く、各国の外はルウが皇領化した。

皇領は国に非ず。よって現在の五カ国は国境を接することなく、争うこともなくなった」

飽きるほど繰り返して教えられてきた。

丹亜は大袈裟に息をつく。

「ティエ師、当時のルウや七賢者はそれで合意してめでたしめでたしでも、今後ルウの民が侵出して来ない保証はあるのですか」

老師はようやく、瞼の垂れかけている目を嬉しそうに細めた。

「ルウの民は遙か海の向こうに、大陸と同じ程の大きさの、メイフエス島という彼等だけの楽園を得ております」

それだけですか？ と呆れて更に追及しようとした時、部屋の扉が小さく叩かれた。

室内の隅に控えていた侍士が両開きの扉を薄く開ける。扉を叩いた者との短いやり取りの後、足早に侍士が近寄ってきた。

「陛下が体調を崩され、御寝所に向かわれた由にございます」

丹亜が眉根を寄せる間に、老師が古地図をくるりと丸めた。

「本日はこれまでにいたしましたよう」

ありがとうございますと、と丹亜は軽く顎を引いて目礼した。

増改築を繰り返した城内の廊下は入り組んでいる。石床の中央に細く続く敷物の上を、丹亜は早足に進んだ。

敷物の外縁を、侍士が前後左右に一人ずつ進む。そのまた後ろに侍女が二人、必死に息を乱さぬようにしながらついて来る。

行き交う人の流れが緩いことから、父の容態はさほど悪くないのが察せられた。察せられたが、歩調を変えずにそのまま王の私室に着く。

大きく縦に長い扉の前で、国王付きの侍士が低頭していた。

「侍医の診察が先程、済みました」

「して」

「お風邪をめされたとの診断にございます」

相わかった、と丹亜が頷くと侍士が扉を開く。

末呉羅まつじろのモノがうつったか。

侍女を一人伴って部屋に入りつつ、丹亜は思った。

異母弟おとうこが風邪をひいたらしいと知ったのは昨日のことだ。父は一
国を背負うには優し過ぎる人で、丹亜よりも先に時間を作って見舞
つたろう。

東方渡来の硝子を嵌めた窓は閉められていて、室内は少しもわっ
としていた。

寝室へ続く扉の前にも、近侍が頭を下げて控えている。面おもてを、と
告げ、続けて丹亜は問うた。

「薬は」

「侍医が処方いたしました」

あったのか。

ほっとして、丹亜は扉へ歩を進める。

ヴィンラ島で医事に関する秘術が編み出されたと噂が伝わってき
ているが、真偽の程は定かではない。

最近、浅瀬を埋め立てて古の大陸いにしえのように陸続きにしようという
計画もあがっていると聞くが、これもあやふやな情報だ。

何せ、国と国の間に茫漠な皇領が在り、国外の実情を素早くしか
も正確に知るのは、意外と困難だった。頼みの綱は行商人くらいだ。
その彼等も、全て教えてくれるわけではない。

ほぼ確かなこととして丹亜が知っているのは、東方、月の国には
大陸中から様々な物品が集まっているということだった。

大陸中央のリイリではなく、東端の国に。

大陸近海は比較的穏やかで、広い港湾を持てる地勢の月の国は、
造船や航海の技術が突出している。海運でも商品を出し入れできる

のだ。

薬も、良く効く物が量も種類も豊富にあるらしい。

侍女を扉の外で待たせ、丹亜は寝室に入った。

一隅の椅子に居た国王付きの侍女が音も無く立ち上がりかけたので、手で制す。居室より小ぶりの室内には、中央に大きな寝台が鎮座していた。

枕に沈み込んだ父の頭が見え、瞼を閉じた顔の安らかな様に安堵する。

脇の小卓上に水差し、杯、畳まれた薬包紙があつた。薄紙の簡素さに眉をひそめる。もどかしい心地になった。

もう少し、薬の買い付けを増やすべきではないか。高価ゆえ、そうそう増やせぬのは解っているが。

侍医の作る薬も、効き目が皆無というわけではないけれど。渡来の薬が足りずに、丹亜でも作れそうな薬を処方されると……

緑の国はその昔、物流の要所で、大陸の要と言われた時期もあったらしい。

今、リィリ王国は、ただ中央に在るだけの国になってしまっている。

食の自給自足は成っているが、特筆すべき産業が無い。良質の木材を輸出しているものの？森林を無闇に減らすべからず？と父祖の遺言があり、細々としたものだ。

やるせない気分で、丹亜は父の私室を後にした。

次は異母弟の部屋に向かう。

途中で、泡を食った様子の若い廷臣が横切りかけた。

貴族の筈だが、酷い狼狽ぶりだった。丹亜を見留めると、礼もそこそこに喋り始める。侍士や侍女が顔をしかめたことに気づく余裕も無いようだった。

「たっ、只今、出入りの商人より恐ろしい知らせを受け、へ、へ陛下にお目通りを――」

「陛下はお風邪をめし、臥せておられる。宰相ではならぬ知らせ

なのか」

「は——そつ、そうでした、宰相閣下がいらした。閣下にお目通りを——」

丹亜は苦笑しそうになるのを懸命に抑え込んだ。

叔父は父の実弟であり、宰相として父と共に国政を担っている点に、強烈な矜持を持っている。今の発言を聞いたら眉を逆立てそう
だ。

この年若い貴族は廟議にきっちり参加してしまい。国王が病弱で、このところ宰相におもねる廷臣が増えてきているというのに、呑気なものだ。

まあ、この小国で地位を上げたところで大した益は無いしな。身の安全さえ保持できれば、没落しても構わないと思っているかも知な。病臥していると聞かされた国王について一言も無く、慌てた風に貴族が立ち去りかけ、たまりかねたように侍士の一人が口を挟んだ。
「その恐ろしき知らせ、丹亜殿下にもお伝えしておくべき内容ではありませんまいな？」

ああ、と貴族は口を横っ開きにして振り返った。

「殿下もお聞きください——つ、月の国が、先頃、月の国が皇領になったそうなのです——！」

「な——」

丹亜だけでなく、侍士も異口同音に声をあげた。侍女も息を呑む
気配が起こる。

「次は我が国の確率がつ、非常に高いと、商人が申ししております
——」

侍士の一人が、一足早く立ち直って問い詰めた。

「真まことですか、それは」

「複数の商人が申すのです。名称も、皇領ゲックと改められたとの
ことで」

なんだその、おくびとしゃっくりの混じったような名は。

つまらないトコロに丹亜が引っかかっている間に、急ぎ閣下にも

お伝えせねば——と貴族はあたふたと去っていった。

このような大事は速やかに口止めを図らねばならないのだ。己の未熟に丹亜が気づいたのは、翌日になってからだった。

「知っていた。半月ほど前に知らせが届いた」

次の日の夕食後、丹亜の私室へ訪れた叔父は、当然のように言っ
た。「兄上が昨日臥せられたのも、その件の心労が嵩んだ故かもしれぬ」

丹亜は一瞬、下唇を噛んだ。声が震えそうになる。

「何故、教えてくれなかったのです」

「兄上も動揺していたし、わたしも同様だ。そなたに教えたとして同じことだろう」

今年三十六歳を迎える叔父は、少々出てきた腹を揺すり、乾いた笑声を洩らした。「兄上など？もはや我が国も、王国である必要性は無いのかもしれない？などと世迷言を申されたくらいだ」

よもや廟議で？と寸時血の気が引いたが、違うと丹亜は自答する。そのようなことが廟議にあがっていれば、流石に丹亜の耳にも届いていた筈だ。

侍女が卓上に緑茶を置き、部屋の隅にさがる。

叔父は太い指先で温度を確かめるように茶器を取った。丹亜も両手で湯気の上る陶器を包みながら、得体の知れない不快感をいだく。月の国が皇領となった知らせは、昨日の内に、あつと言う間に城中に広まった。広まった翌晩に、わざわざその件だけで宰相が来たとは思えない。

酒を飲むように叔父は茶器を傾けた。人払いを望む気配は無い。我慢できずに丹亜は尋ねた。

「わたくしに話があるのでしよう」

「でなくては、来ないだろう」

「仰ってください」

叔父を見据えて促してから、ちらりと壁際の侍士や侍女へ目を投げる。受けて退室しかける彼等にも届きそうな、響く声で宰相が言った。

「成人前のそなたに、他に聞かせられぬような話などしに來ないぞ」
同じ年の侍女と目が合い、その女性的な姿形を目の端に映したまま丹亜は主張した。

「わたくしは今年、成人です」

「冗談も判らぬのか。晴れて我が娘となる頃には判るようになってほしいものだな」

とどまっていた者達によって、室内の空気が、一瞬、固まった。
気まずげにうつむいた侍女から、丹亜は叔父に目を移した。茶色の双眸が澄まして見返してくる。

「冗談を申しているのではない。今宵は、そなたを我が愛息子まなむすこの妻に迎えたいと言いに來た」

しばし、丹亜は小さく口を開けていた。やがて唇がわななき出し、言葉を絞り出す。

「父上も、そのように……？」

「今のところは、そなたが領いた後に喜んでいただこうと考えている」

「わたくしが領くとも！？」

声を荒げると、苦々しげに叔父は顔を歪めた。

「やはり解っていないかったのか——」

何を、と喚きそうになった丹亜に、ぐっと叔父は顔を寄せてきた。
不意に、地を這うかのように声を落とす。「よいか、これまで王家第一子の女子おなごは男子誕生と同時に消されてきた。そなたは義姉あねうえ上が命と引き替えに産み落としたが故、兄上とわたしの情けで生かされているにすぎぬ」

莫迦な——

頭の中ではそう叫んでいたが、丹亜は瞠目することしかできなかった。

叔父の瞳に、見開かれた丹亜の赤土色の目が映っていた。地下で暗く燃える松明の火のように、赤く揺れている。

呪詛の如く、低い叔父の声が鼓膜を震わせた。

「これは、この先もそなたを生かす為の縁談だ。成人を迎えると同時に公表する」

その心積もりでいるように、と続けた台詞は、元の声量に戻っていた。

茶を飲み干すと、叔父は部屋を出ていく。丹亜は、礼儀を以って見送ることができず、茫として椅子に座ったままだった。

丹亜様、と年配の侍女の小さな声がして、目だけ上向ける。気遣わしげな顔があった。

「御承諾なさるのですか……？」

同じ部屋に居たとて、壁際までは距離がある。そこで控えていた者達に、ひそめた会話までは聞こえなかったか。

「簡単には……決めかねるな」

応じた声が掠れ、問うた侍女は大きく同意の頷きを返してくる。

茶器を片づけていた同い年の侍女が、痛ましげな目をした。

無理もない。

叔父の子息はただ一人。

今年の初めに生まれたばかりだった。

異母弟は一週間ほどで完治したものの、父の風邪は長びいていた。
私室で、丹亜は苛々と、巻物庫から見つけ出した記録を目で追っ
ていた。

他国の女性王族も、リイリ王国のような理不尽な扱いなのかどうか。

どうもリイリだけである。

しかしながら、ロマ公国の継承も怪しげだ。リイリと逆で、かの
国は女性だけが代々君主となっている。長子が男児だった場合、抹
殺されているのかもしれない。

乱暴な話だ。大体、継承権を消したいなら王族から外すだけでよ
いではないか。なにも殺すことはない。

このような考えは、甘いんだろうか……

「そろそろ亭柄様ていえがおいでになる時間です」

同い年の侍女が声をかけてきて、丹亜は嚙んでいた下唇を結び直
した。知らず、片端が上がる。

「成、ティエ様とお呼びしないと嫌がられるのに」
なる

年配の侍女が卓上から巻物を片づける間に、成は盆に茶器を用意
し始める。一足早く十五になった侍女は、同い年の気安さか、ちょ
っと口をすぼめた。

「真名を頂けるのは、とても名誉なことです」

「故に、放棄はしていない」

丹亜は両手の先を組んで伸びをする。「ただ、親から贈られた自
分の本名が好きなんだそうよ」

今は亭柄・ティエと名乗っている丹亜の師は、六暦一四一年生ま
れ。百年代半ばは、身分が高いとされる人々が、名に片仮名ではな
く真名を使い始めた頃だ。

現在では、民衆でも、生まれた子に片仮名で名をつける親は皆無

と言っている。平和が訪れ、大陸全体で識字率が向上した所為で、真名はじわじわと普及していた。

ティエは姓さえ持たない貧しい生まれだったが、こつこつと知識を蓄え、王族の師として先代のリイリ国王に迎えられた人だった。

末呉羅まつろが生まれ、その師も請け負った際、これまでの功績も讃えられ、改名の許可と共に真名を授与されたのだ。

最初、ティエは教え子でもある現国王に、迷惑ですな、ときっぱり断ったらしい。

だが、なんなら真名を三字使ってもいい、と、これまた教え子で褒美の提案者だった叔父が粘り、渋々受けるに至ったそう。

今も、真名の字数で地位や実力を示すのが流行っている。

王族の如く三字も使った名を公式の書き物に書かされる羽目になるのだけは、回避したかったようだ。

廊下から、やり取りの微かな声が聞こえた。

丹亜が侍士に目で頷き、扉が開く。

左手で巻物を幾つか抱え、右手の杖で身体を支えた老師が、ゆっくりと入室してきた。侍女の引いた椅子に、どさりと腰を落とす。

週の三日目は史学を学んでいた。

宜しく願いましたと、と双方が背筋を正し、授業が始まる。

早速に、丹亜は口火を切った。

「月の国はどうなったのですか」

これまで、語学と関わりない、算術と関わりない、と回答を拒否されてきたのだ。

「統治者と国名が変更されました」

ようやく答えてくれながら、師は巻物の一つをほどいた。大陸東部の地図だ。

東方は、人が右を向いた横顔にも見える。月の国は、眼窩から鼻梁にかけ、名の如く三日月のような形だった。

月の国には皇領の三地区が接している。北西をサージ地区、南西をティカ地区、西をアル地区。こうして見れば、元より、ルウの民

の脅威を最も受けていた国なのだ。二百年は、もちこたえた方なのかもしれない。

「月の国は代々首長が後継者を指名してきたわけですが、今回、指名されたのはルウの民だったわけです」

「魔術なる怪しげな技にモノ言わせたわけではなく？」

疑いを丹亜が口にする、嘆かわしいと言いたげに、老師は杖を両手に握った。床を突く。

「殿下はどうも、ルウの民を敵視なさる傾向がありますな」

「危険視しているだけ」

師は杖頭つえがしらに両の掌を乗せる。

「猜疑を持つなどは申しませぬが、上に立つ者として、それを前面に置く姿勢は望ましくありません。そのような心配は廷臣にさせれば宜しい」

丹亜はムツとした。

「わたくしは廷臣のようなもの。されば望ましい反応でしょう」
へらず口に、老師は臉を押し上げるようにこちらを見た。

「いずれ国政を担っていかれる御方が、何を仰っておられるのか？」

赤錆び色の視線を受け止めた丹亜は、鼻の奥がツンとした。

「ティエ師でも御存知ないことがおありか。わたくしは女性じょせいとして生まれたが故、国政に関わりたくとも資格が無い」

垂れ気味の臉が、瞬きに合わせてふるりと動いた。

「初耳です」

授業を終え、丹亜は不機嫌に異母弟の部屋へ向かった。

ティエは初耳とこと言いながら、何か知っている気がした。

十のみぎりから師事しているのだ。向こうもこの五年間の丹亜を知っているだろうが、こちらも同じだけ時を共有している。

継承についての質問という形で食い下がったけれど、末呉羅の風邪がぶり返したらしいと知らせが来て、断念せざるを得なか

った。

歳の離れた異母弟は丹亜に懐いてくれている、異母姉上と遊びたいと、熱に浮かされながら洩らしているらしい。二妃も継子の丹亜を嫌な顔せず迎えてくれるので、見舞うにやぶさかではなかった。

丹亜は、幼い頃から風邪もあまりひかずにいる。リイリにおける乳幼児の死亡率は低くないから、大層幸運と言えた。

健康な分、おてんばだった。ほんの数年前まで、侍士や侍女を随分と振り廻していたものだ。

先導する侍士二人の背を目に映し、下唇を噛む。

ずっと、この身を護る為に従ってくれていると、疑っていないかった。しかし、もしかすると逆の可能性もあって就いているのだ。

『猜疑を持つなどは申しませぬが――』

先程聞いた師の台詞が思い出され、前歯に力がこもる。

父は熱が上がったり下がったりを繰り返しており、いささか頬がこけてきている。今は詰問も相談もできず、丹亜は何を信じていいのか判らなくなってきていた。

残る頼りはティエくらいしか居ないのに、はぐらかすような態度をとられては……

末呉羅の私室が見えてきて、丹亜は雑念を振り払う。

熱に苦しんでいる幼子と看病で疲れている母御に、気鬱を気取られるわけにはいかない。

侍女に悟られただけでも、こういう態度であるべきなのか混乱しているところだった。

本当は、丹亜はどうにこの世に居なかったかもしれず。

丹亜に仕えてくれている者達には、別の人生があったかもしれない。名ばかりの王族にかしづくより、もっとと有意義な。

廊下の敷物が、ここ数日、やけに細く感じていた。

部屋に入ると、すぐに二妃が申し訳なさそうに歩み寄ってきた。

丹亜にとっては母よりも姉と言った方が自然な年齢で、今年二十二

歳である。

「今し方、眠ったところなのです」

丹亜は微笑して応じた。

「睡眠が一番の治療と聞いたことがあります」

熱で赤らんだ寝顔を見舞い、？母上の言う事をよく聞いて早く治すように？と紙葉かみはに書いておく。

葉を寝台脇の小卓に置いた時、水差しと杯の他に葉の包みが目に留まった。父の所にあつた物より質素な紙質に眉根が寄る。

漉き紙すはまだまだ貴重で、質の良し悪しは見ればすぐ判る。中にくるまれている物も、紙質を見れば判ってしまう。

東の異変という情報を持ち帰った商人は、葉は扱っていないかったのか。それとも混乱によって扱えなかったのか。

御身も大事にしてくださいと二妃に告げ、丹亜は辞去した。

苦々しい思いを抱え、自室へ戻る。

こんな時に、ルウの民に呑み込まれるとは。

速やかに国政の交代が成されていればいいが、いきなり怪しげな術を使う一族に移譲されて、そう巧くいくとも思えない。かの国の民衆はいい迷惑だろう。

物流に支障が出るであろう大陸各地も同様だ。

老師は、そのような危惧を全く口にしなかったが。

東の果てへは、馬を用いても、片道で三ヵ月かかるという。

往復で半年か。

私室で長椅子に背をあずけ、丹亜は天井を巡る梁を睨み据えた。

半年後には十五になってしまっていて。

○歳の従弟の婚約者としてしか存在を許されなくなっていて。

従弟が無事に成長したとしても、成人後しか婚姻を認められていないリイリでは、丹亜が婚の儀するのは早くて三十歳ということになる。

それまで又も十五年もの間、無駄に生かされて……？

笑声がこぼれそうになった口を覆う。のけ反って、涙が滲みかけ

た顔に両手を押し当てた。

どう考えても、形ばかりの妻ではないか。

そこまでしても、自分は生きるべきなのか？

判らない——判らない……

翌日、小康状態になった父が執務を私室でこなしていると聞いて喜んだのも束の間、異母弟がいつ時、危篤状態に陥り。

幼子がなんとか持ち直した二日後の朝、丹亜は城を出た。

薬草を摘んでくる、という口実で。

馬車がかたりと横揺れし、天井から下がった紐を掴む手に力を込める。

斜め右に座す同乗の成は、揺れに酔ってしまったのか、青白い顔をしていた。

その隣のティエは、目を閉じているのか、瞼に覆われて瞳が見えなくなっているのか、判然としない。杖を床の毛皮に突き通しているかのように立て、揺れるがまま、皺だらけの両手で握り締めている。

何処でこの老師を下ろすか、丹亜は決めかねていた。

同行するつもりは微塵も無かったのに。

『一応、お止めしに参りました』

そう言つて、城の門前で乗り込んできた。

薬草を摘んでくるだけです、と建前を口にすれば、承知しております、と応じたきり、どっかりと座って梃子でも動く様子が無かった。

不貞腐れた気分が顔に出ないようにしつつ、丹亜は馬車の小さな格子窓から外を見る。城下町を過ぎてからは、森の合間に集落、畑地、牧草地が現れては消えるの繰り返しだった。

三、四日で辿り着ける王家所有の森林の一つは、国の東南に広が

っている。線も曖昧な国境を越えた先は皇領アル地区だ。

薬を買いに行きたい。王族が直々に出向けば、混乱している月の国でも、それなりの薬を得られるのではないか。

昨日、叔父に談判したら、やや迷いを示したものの却下された。

そなたが行く必要は無い、と……

成人し婚約すれば、女性王族の身で国外に行く機会など無いだろう。

だから、成人前に外の世界をこの目で見ておきたい。

それらも付け加えて懇願したら、今度は即座に、駄目だ、と言われてしまった。

『半年もかけて商人の真似事をするくらいなら、未来の夫の世話をした方が有意義だろうて』

小馬鹿にしたような叔父のその言葉が、丹亜の反骨心に火を点けた。自棄という名の火薬もごく近くに積まれていた為、爆発するのに時間はかからなかった。

城を抜け出すと告げたら、侍士や侍女は当然ながら止めてきた。

止められるのは判っていた。一人でも行く。そなた達は知らなかったと白を切れ、と言い切り、叔父に談判した時と同じ理由を吐き出した。

すると、近侍達は、叔父が歯牙にもかけなかった？付け足し？の方に同情したようだった。

分かりました、と年配の侍女が供を申し出てくれ、結局、丹亜付きの三分の一が薬草摘みのどさくさに紛れて出国することになったのだ。

二頭立ての箱馬車二台に分乗し、残りは騎馬。一同半年間の長旅を覚悟してのことなのに、ティエの乱入は出端を挫かれたとしか言いようがない。

齢七十の老爺を、用意も無く半年も連れて歩けるわけがなかった。かと言って、馬車から叩き出すわけにもいかない。

夕闇迫る頃、先行させた侍士と地方貴族の出迎えを受け、その日

の宿となる館やかたに到着した。

丹亜はこの主あるじに、ティエを城まで送ってもらおうと秘かに手配した。

が、翌早朝、老師は既に馬車に乗り込んでいた。

驚きに顔が引きつった丹亜の前で、ティエはしれっと、年寄り
朝が早いものでして、とのたまった。

明日には王家の森へ着くという夜。泊まった館で、やむなく、丹
亜は正直に師に話した。

ティエの返事は、承知しております、だった。

「実際に経験せねば納得しかねることはございます。故、お止めし
には来ましたが同行にとどめている次第」

「……帰国まで半年はかかる。ティエ師の分まで支度を整えていな
いのです。特に旅費」

歯がゆさに丹亜は目を落とした。城から持ち出せたのは、丹亜の
個人的な宝飾品だけだ。薬の代金を含めて、ぎりぎり足りるか足り
ないかだと侍士から聞いている。

「此度のこと、国費に手をつけなかった点は評価いたします」
宰相の許可が得られれば国費で出立しただろうから、褒められた
気がしない。

唇を噛む丹亜の前で、ティエは続けた。

「そも、概ね殿下の認識は甘うございます。旅程の大半を皇領で過
ごすのですぞ。必ず泊めてくれる貴族の館なぞございませぬ。如何
なさるおつもりか」

「野宿を厭うつもりはない」

「口で言うは容易いですな」

カッとして睨めば、ばかりと、赤錆び色の視線とぶつかった。「
随行者達が、それをさせるとお思いか」

否だった。

解っていることを指摘されたのが腹立たしい。

泣くのは悔しくて、奥歯を噛み締める。

そのつもりが無くとも、丹亜はこの我儘で、既に色々と彼等に強いてしまっている。

今回、同行している者達だけでなく、城に残ることになった者達も、下手をしたら咎められる。王女の出奔を見過ごしたことになるのだから。

衝動に抗えない己の青さをさらけ出され、丹亜はもう、駄々をこねるしかできなかった。

「でも、いききたいのだ……わたくしは」

老師は重そうな瞼を閉じ、後は何も言ってくれなかった。

王家所有地の所為か馬車が入れるようにはなっていたが、森林に道と呼べる代物は無いようだった。

これまでになく酷い揺れに悩まされること数時間。徐々に進みが遅くなり、格子窓から外を見ると、木々がまばらになりつつあった。いよいよ森を抜ける頃合いか。

なれば、馬の歩みも速められそうなものなのに。

もはや、勢いに任せて出国してしまいたかった。

丹亜はそわそわと窓外に目をやっていたが、そのうち、歩いた方が速いのではないかと思えるくらいにのろのろした動きになってしまった。

どうしたのか、と丹亜が呟くと、成なるが御者台近くの小窓へ問いかける。

手綱を取っている侍士の声が、やや掠れて聞こえた。

「先程から、馬が進みたがらなくなっておりまして……」

「国境と思われる場所まで、後いかほどか」

「さほど無い筈です」

返答に、丹亜は眉をひそめる。城を出る前、年嵩の侍女から進言されたことがよぎった。

関を通して出国した方がいいのではないかと。

『昔から、関以外の国境くわんがいは生き物が近づきませぬ』

関を通して出国などできぬ相談で、国境に生き物が居ないとすれば、抜け出そうとしている身には却って好都合の筈だった。

「されば歩こう。馬は引けば良い」

丹亜は、殆ど停止していた馬車の扉に自ら手をかけた。開ける間に、ティエも杖に体重をかけ腰を浮かす気配がある。何処までもついて来るつもりなのか。

しかしながら、こんな森林の外れで置き去りにできない。丹亜は

師の下車を助けるつもりで、先に外へ踏み出した。

外は春の日が柔らかく辺りを照らしていたが、何故か、背筋がぞくりとした。

草地に降りるや緊張してくる。

知らず固唾を呑んでから、丹亜はよろりと降りてくるティエの空いた腕を支えた。

老師は降り立つと、右手の杖に縋るようにして左手で腹の辺りを押さえた。やはり何か感じ取っているのか。

馬は、馬車に繋がれたものも侍士を乗せていたものも、その場で足踏みを繰り返すばかりだ。明らかにこの先へ行くのを嫌がっている。手綱を取られていなかったら逃げ出しそうにも見えた。

行く先の視界は悪くなかった。木も茂みも少なくなっていて、大地は緩い起伏を描いている。育ち始めた草が、ひたすらに、緑の衣を幾重にも被せたように広がっていた。

遠く青い空との狭間は羊毛のような雲が幾らかあり、淡く霞んでいる。

巨大な絵の如き光景。

動物の姿が、画家によって描き忘れられたかと思うほど、全く無かった。地にも、空にも。

風がひとひら流れ、丹亜は意を決した。

前に進もう。

けれど、一步をなかなか思い切れない。

わけもなく、やめておけ、と心の奥底がしきりに忠告してくるのだ。

どうもそれは、丹亜だけではないようだった。同道の皆、立ち尽くしている。遮る物は何も無いのに。

丹亜はぎゅっと目を閉じた。進むしかない己の現状を思い起こす。二、三步重い足を動かしたところで、ぐっと腕を掴まれた。悲鳴を呑み込んで振り返ると、ティエだった。

老師は、ゆっくりと白髪混じりの頭を振った。

「そこまです。わたしの記憶では、もう十数歩で国境です」

「と、止め、ないで……」

言ったものの、どうしてか歯の根が合わない。掴まれた腕も振り払えなかった。何か得体の知れない恐怖が、足元から這い上がって来ていた。

ティエは丹亜の腕を放さず、杖を持った方の手で、不自由そうに懷から布包みを取り出した。

「ルウの民がどのようなにして大陸の守護者であるか、一端をお教えいたします」

老爺が包みを開くと、震えながらも傍に控えていた侍女の何人かが声をあげて後ろへ飛び退いた。驚いた馬が暴れそうになり、必死に青い顔の侍士達が御す。

包みから顔を覗かせたのは、潜り蛙だった。冬を土の中で過ごし、暖かくなると出てくる大きめの蛙。

一体いつから、と侍士の一人が口を歪める。一昨日泊まった先の庭で掘り出した、と悪びれもせずにティエは応えた。

「可哀相だが、鳥に食われたと思って諦めてもらう」

不穏な発言に、皆の目が老人と蛙に向く。

布の中の茶色い蛙は馬と同じく、もがいて逃げ出そうとしているように見えた。

「我々の目には見えませんが、ルウの民は関を除いた国境全てに、とある結界を張っております」

ティエは言うなり、蛙を前方に放った。蛙は宙にゆるりと弧を描く。

中程で一瞬、ちかりと光った気がした。

低めに放られたから、前足から綺麗に着地した。しかし、不意に腹を向ける。そしてそのまま跳ねようとし始める。奇妙な、痙攣のような動きだった。

「結界に触れてしまうと、心が食われると言われております」

懸命に蠢く蛙を丹亜が凝視する横で、師の低声が静かに説明した。

「つまり、脳に作用するのです。個体差はありますが、影響を受けないに済む者は滅多におりません。術者の力量が桁違いであります故」
お解りいただけましたか、とティエは締め括った。

しばらく、誰も口をきかなかった。

やがて成が、丹亜様、と囁くように発した。

「城に、戻りましょう」

弱く腕を引かれ、丹亜はよろよろと後方へ歩き出す。

小さな生き物は、王女の涙が地にこぼれても尚、足掻き続けていた。

幾ばくかの薬草を摘み、一行は帰路についた。

王家の森が遠ざかった頃、ティエがぼつぼつと語った。

「わたしは四つで親を亡くしました。飢え死にしかけていたところをルウの民に拾われ、皇領アル地区の皇領府で育ったのです」

懐かしげに目をしばたたき、ティエは微笑んだ。「拾ったのは、領内を視察していた新任の主管でした。衣食住に加え、学問も……随分と良くしてもらったものです。お蔭でわたしはルウの民鼯鼠で、殿下に要らぬ不審を与えてしまったようですね」

相槌も打てず、丹亜は馬車内の座布団に身を沈めていた。老師は一方的に話し続けた。

国境の結界は領結界と呼ばれ、国同士の戦や大規模な人の出入りを抑制する為にルウが編み出した秘術らしい。

本能に訴えかける魔術で、結界そのものに触れる前に、近寄らせないのが目的とされている。代々、ルウの民の中でもとりわけ力の強い皇族が張っているから、大陸の人間にはほぼ漏れなく効き目があるそうだ。

でも完全ではないんですね、と成が述べると、ティエは頷いた。

「ごく稀に、怖れを知らぬ者が居る。豪胆と呼ぶべきか、何かが抜けていると呼ぶべきかは決められぬが。ただ拳句、結界に触れてし

まい、無事で済んだ者が居るかというところ、そこまでの猛者の話はいぞ聞いたことがない」

格子窓の外へ目を流し、丹亜は溜め息を押し殺した。

自分はまるで城という籠の鳥だと思っていたのに、国自体が柵に覆われていたとは……

塞ぎ込んだ丹亜を乗せた馬車は、葬送の如くに国の中心へ向かった。

日没後、その地の貴族に宿を提供してもらった。

夕食が済み、丹亜が通された一番良い部屋に、ティエが訪れた。

老師は勧められた椅子に腰を落とすや、口を開いた。

「次はお止めしませぬ」

次……？ と聞き返しかけた言葉を吞み込み、丹亜は深く頭を下げた。

「此度は、ティエ師にも申し訳なく。あそこで止めてくれたこと、感謝しています」

ティエが居なかったら、恐ろしい事態になっていたろう。丹亜だけでなく幾人もが。

考えただけで寒気がする。身をすくめた丹亜の前で、老師は杖頭つえがしらに両の掌を重ねた。

「国境を抜けるは不可能であり下策と御理解いただければ、それで宜しい。国を出るには関しかないので。入る際も同じく」

「……はい」

「我が国に幾つ関が在るかは覚えておいでですか」

「五箇所」

内一つ、ロマ公国方面に向く南東の関は、ここから近い。

師は満足そうに口の両端を上げた。

「わたしはリイリに招かれ四人の教え子を持ちましたが、女性にょしやうは殿下だけと先日気づきました」

話が飛んで、丹亜は不審の目を向ける。老爺は笑んだまま強調し

た。「先日まで、気づきませなんだ」

丹亜は口をすぼめる。

「つまり、わたくしが成人を迎える歳となっても一向に女らしくない
と仰りたいのか」

はっはっは、とティエは幾本か歯の欠けた口を開けて笑う。扉近くに控えていた成が抗議の視線を投げたが、背中に目の無い師が判る筈もない。

片膝を愉快そうに一つ叩いて笑声をおさめ、ティエは言った。

「殿下は性を超えて王族たられたのですよ。四人の中で特別優秀とは申しませんが、意識だけは国を負って立つ一人として、わたしの前に座しておられた」

思いがけない台詞に、丹亜は目頭が熱くなりかけた。唇を引き結んで顎を引く。

涙をこらえるだけで精一杯の丹亜に、殿下も国を担える、とティエは続けた。

「ですから、王女として、堂々と関を通して出国なさいませ」

え——と言ったつもりだったけれど、喉が詰まって音にはならなかった。ティエ越しに、成が大きく褐色の目を見張っている。自分も、きつと似たり寄ったりの表情をしているだろう。

老師は懷から封書を取り出し、向けてきた。かなり良質の紙だ。受け取って裏返せば封蝋が落とされている。覚えのない印がくつきりと捺されていた。

「皇領月区げつくにも皇領府が設置された筈。月区主管に渡してください。良い菓を融通してくれるでしょう」

「ティエ師——」

漏れ出た声は涙まじりだった。封書を握り締めそうになって、丹亜は慌てて指先の力を緩める。

茶器の乗った卓上に、ティエは小さな布包みを置いた。ついでに足腰に効く菓も見繕ってきてください、とぬけぬけと言う。

丹亜はもはや、頷くしかできなかった。

翌午前、王女に畏まる者達に何食わぬ顔を向け、薬を買い付けに行く、とリィリ王国の南東の関を通過。隣接する皇領の関所で、月区への通行証を取得。一行は皇領アル地区へ入った。

月区に最短で着くには、東の関からの出国が望ましかった。だが、改めてそこを目指すには？薬草摘み？で出てきた丹亜には日が足りなかった。関を封鎖される恐れがあったから。

遠ざかる関門^{せき}を、丹亜は馬車の裏窓から長いこと見ていた。
門の脇に佇む、老師の小さな姿が見えなくなるまで。

三日ほどは、天候にも恵まれ、平穩に旅程をこなしていった。

馬車は二台共、余計な装飾を除き、質素にしてある。

街道さえ外れなければ盜賊の類に出くわす率はかなり低いらしいが、他の面々にも目をつけられないに越したことはない。

皇領の街道は、素晴らしく整えられていた。

一直線に切り石が敷かれ、水はけ用の溝もある。歩道と馬車道はきちんと分けられていて、馬車同士も余裕ですれ違った。

両脇には最初、賑々しく墓所や墓碑が並んでいた。

リィリ王国では糸杉に囲まれた静かな一画に墓地がある。死者の眠りを妨げない配慮からだ、皇領の死者は生きた証を示すことだけに重点を置いているらしい。だから、目立つ街道が人気なのだそう。

春先の所為もあってか色とりどりの花が手向けられており、墓碑の脇に腰かけて休んでいる徒歩の旅人も大勢居た。

風変りな光景は長々と続いたが、次第に減っていった。

やがて、街道以外は草原だけという風景が増えた。

国境から見た時よりも平坦に、大地には延々若葉の絨毯が敷かれている。天空は薄い雲の他、触れることの叶わぬもどかしい碧が広がるばかり。

ただ、見晴るかせば、鳥や放牧されているらしき家畜の姿を目にすることができた。

また時折、街道沿いには馬の交換所や旅人の為の店が姿を見せた。馬車で丁度一日行程の辺りには、華やかな墓所が再登場し始める。宿や露店も大きめになって軒を並べていた。

そんな地点は小さな街のようになっていて、必ず見張り台がある。早馬での知らせが行き交っているらしい場面を目撃した時は、ひやりとした。

一応父には置手紙をして出て来たし、最終的にティエが事情の説明を請け負ってくれたが、すんなり許されるとは限らない。

王族が僅かな供だけ連れ、公式を装った非公式でうろつくなど、国の威信という点で拙いことこの上ない。連れ戻される可能性は大いにあった。

懸念も抱えつつ迎えた四日目。

だいぶ日が昇っている時刻になっても、天に灰色が満ちていた。お蔭で昨晚からの冷えが緩和されずに続いている。

格子窓に掛けていた布を少しずらし、外を見る。たまたま追い抜いた徒歩の旅人達が、ほわりと白い息をこぼしていた。

空を見上げ、丹^{にあ}亜は眉をひそめた。雲の流れが怪しい。下方と上方と動きに差がある。

これは確か、嵐になるのではないか。

簡易で構わないから早めに宿泊先を定めるか、馬に無理をさせるか。

かえ馬を気軽にできる程の金銭的余裕が丹亜には無い。王家の馬だから名馬だろうが、この先の使役にも耐えられるのか判断がつかなかった。

馬については侍士の方が詳しいから、丹亜は御者台に近い侍女達へ問わせた。急げるか、と。

「急ぎます。雨が降る前に、この先の川だけでも越えた方が良さそうですし」

侍士の返答の後、軽くパシと音がして、馬車の速度が上がる。

これまでに一度川を越えたが、皇領は橋も見事だった。石造りで、街道の幅もそのまま保たれていた。多少の増水ならびくともしそうになかったが、リィリの脆い橋に慣れている身には、やはり雲行きの怪しい日はさっさと川を越えておきたい。

幾らも行かないうちに、窓に掛かった布が薄白く光った。少しして、馬車の走る音を大きくしたような物音が響き渡る。

水神ウル・ラー・カーよりも早く雷神ユタ・カーのお出ましか。

丹亜がまた窓掛をずらそうとすると、隣に座っていた成なるが怯えたように言った。

「開けないでください、入って来たらどうするんです」

「音がまだ遠いし、大丈夫よ」

草原で雷光がどのように落ちて行くのか、丹亜は興味があった。

「成もティエ師の話を聞いていたでしょう。光よりも音は少し遅い。故に雷が近づくと判る」

成は十歳で王女付きとして城に来たので、殆ど丹亜と共にティエの講義を聞き続けていた。

「亭柄ていへ様のお話は退屈なモノが多かったです」

先日の領結界の話は熱心に聞いているようだったのに、そんな返事を成は寄越してきた。丹亜は肩をすくめて見せ、ほんの少しだけ布を動かそうとした。

パツと閃く光と一緒に、悲鳴が飛び込んできた。続いて硬い物がぶつかり合う音が起こる。

雷鳴と馬のいななきにまじり、逃げろっ、と侍士の一人の声が叫んだ。

馬を励ます御者のかけ声が起こり、丹亜はぐんと引っ張られたように背後の座布団に倒れ込んだ。前に座っていた侍女二人が前のめりになりかけ、声をあげて天井からの紐にしがみつく。

鼓膜を震わせるのが、蹄と車輪が必死に街道を噛む音なのか、空から降る音なのか判別がつかなくなっていた。ヒョオオオ、と不気味な奇声も割り入ってくる。

成が憤慨したような声をあげた。

「街道なら盗賊の類は出ないんじゃないのだったのっ」

ティエ師の話、先日から真面目に聞くようになったのか。

場違いな感想をよぎらせながら、丹亜は身を振って裏窓から外を見る。

白っぽい背景の中で、侍女が分乗していた後続の馬車や従ってい

た騎馬は、早くも黒い塊のようにしか見えなかった。他の騎馬に囲まれているようだが、はっきりしない。方々に散った影が動き回っている。

何せ、街道に居たのは丹亜達だけではなかった。他にも馬車は走っていたし、徒歩で荷車を引いたり押したりして通っている人々も居た。嵐を察し、皆、それぞれの行く先に急いでいたのだ。

はっきり見て取れる距離の者達も、ある者は後ろを振り返りながら丹亜達と同じ方角へ逃げようとしているし、ある者は僅かな茂みでも求めているのか、わき目もふらずに街道を外れて行く。

それらを蹴散らすように駆けてくる数騎があった。

違和感が浮かんだ瞬間、雷光が思考をも白く染めあげる。同時に、すれ違った馬車があった。その御者は進行方向で起こっている事態に気づいたらしいが、容易く向きを変えられない。繋がれた左右の馬が首をてんでに振るのが見えた。

丹亜も同乗の侍女達も、離れ行く馬車を見送るしかない。

だが、すぐに皆、息を呑んだ。

向かい来る騎馬は三騎。一騎も止まらず、立ち往生している馬車を素通りした。

侍女の一人が御者台を振り返った。

「追いつかれる！」

何ッ、と切迫した侍士の声を背に聞き、丹亜は気づいた。

「先程から、他の者に目もくれていない」

「――では、もしやリイリの――」

成が丹亜に殆ど頬を寄せて裏窓の格子にしがみつく。

「なれば、置き去りの者達はある意味、無事だが……」

丹亜は言葉を切って、じわじわと距離を詰めつつある三騎を見据えた。リイリの警邏隊けいろうたいに、あのような部隊があっただろうか。正規隊は茶色い革の甲冑を身に着けるが、丹亜達と同じく非公式に皇領入りしたからなのか、三騎とも黒尽くめだ。

いずれにせよ、馬車と単騎ではどちらが速いかなど考えるまでも

ない。

僅か四日で旅を妨げられるのは不本意だった。

「追いつかれたら抵抗はするな。命を大事にせよ」

丹亜は腰を浮かすと蓋になっている座面を開け、未換金だった装飾品の包みを帯の間にねじ込んだ。

殿下！？ と狼狽する侍女の声に被せ、言を継ぐ。

「ここまでついて来てくれたことに感謝する」

なりません——何を——と侍女達は口々に言い、揺れる車内で腕を押さえてくる。それを払って、丹亜は横手の格子窓から外を窺った。

馬車が丁度、やり過ぎすように立ち止まった二人連れの旅人を追いつく。追っ手と似て、二人共、頭部から首元まで布を巻いていた。目元の辺りだけ露わになっている。

偶然、背の低い方と目が合った。

ほんの刹那だったのに、瞳の色が判った。草原を映したような翠。みどり誘われるように、丹亜は馬車の扉を開けていた。

侍女が、停めて！ と御者台に向けて悲鳴のように発する。馬が鳴き、がくんと前後に揺さぶられ、丹亜はそのまま転がり出た。

視界が一転二転したけれど、運良く柔らかな草地にでんぐり返る。名を呼ぶ声に顔を上げれば、成が走り出して来るのと、迫る騎馬が見えた。

夢中で立ち上がり、丹亜は追っ手に背を向け駆け出した。

大きな川が、目と鼻の先だった。立派な石橋が架かっていたが、その下方を目指す。

と、ピッと高く口笛のような音がした。転びそうになりながらも目をやると、さっきの二人連れが並走するように橋へ向かっていた。

顎まで布を下げた背の高い方が、口元から手を放して怒鳴った。

「死ぬくらいなら橋い渡れっ」

死ぬ気など無かったが、一か八か川に飛び込もうとしていたのを

見抜かれていたようだった。川辺に駆け下りかけていた足をがむしやらの動かして二人連れを追う。

王族として護身術を学んでいたこともあり、瞬発力は多少あった。けれど、持久力はあまり無い。

二人は、馬車で追い越した筈なのに、いつの間にか並んでいた上、今や先に立っている。城の中ぐらいいしか歩いていなかった丹亜とは、身体の強さがまるで違うのだろう。

丹亜様あーッ、と金切り声が起こった。振り向けば、一人懸命について来ていた成が騎馬に迫り着かれそうになっている。

一騎は停まった馬車の所に居て、二騎が執拗にこちらへ向かってきた。

わたくしに構うな——危ない——っ。

そう叫びたかったが、上半身全てで息をしているような状態で、声にならない。成、と喘ぐように口を動かした時、丹亜の横を瘦身がすり抜けた。先を行っていた筈の、緑眼の方。

風を切る音がし、何かがその背を越えて飛んだ。成に並びかけていた馬が、前脚を跳ね上げる。

「止まん、走れっ」

低声に叱咤され、丹亜はもつれそうな足を動かす。先に行けっ、と言いきま、男が横手で何かを投げるのが視界に映った。背後で馬と人の声が入り乱れる。

つんのめりそうになりつつも、石畳の街道に戻り、長い橋を渡る。渡り切る頃には己の鼓動と呼吸の音がうるさくて、他の物音が聞こえなくなっていた。

倒れ込みそうな半身を必死に起こして振り返る。自分だけが到達したと思ったのに、男が大差無く走り込んできて、同じように橋の向こうに目を投げた。

成が、両手を泳がせながら橋に差しかかっていた。助けに行ってくれたらしい瘦身の者が、後ろを気にしながら続く。その姿の遙か遠く、逃げ去る一頭の馬があった。手前の草地に落馬したらしき人

影。馬車の所に居た一騎が、ソレに駆け寄ろうとしていた。

残る一騎が馬体を立て直し、馬首をこちらに向けかけている。

後ろ、と言いたいの舌が回らない。喉がからからで、丹垂は噎せただけだった。代わりに横に立った男が、来る！ と大声を放つ。欄干に縋って立ち止まりかけた成の背をひと押しし、瘦身は橋の手前に引き返した。つと、街道に跪く。

何をしていると問う間も無く、騎馬が突進してくる。

あっと思った途端、石塊が飛び散り、籠もった物音と共に横一線、丈高く緑の物体が現れた。馬が棹立ちになり、脚が宙をかく。騎手は辛うじて落馬を免れたが、首にしがみつくしかできずに馬上で跳ねた。

何だアレは――！？

未だ苦しい呼吸さえ忘れそうだった。

現れたのは、木の茂みに見える。

しなやかに痩せた身が翻り、橋の半ばまで来ていた成の腕を引っ張ってこちらに走ってきた。

頭部を覆った布越しに、初めて声が聞こえた。若そうな男の声。

「もう少し行つて」

背の高い方が、しょうがねえな、と不意に面倒臭そうな口調で言つた。

「しょっ引かれたら、ちゃんとお前がやったって言えよ？」

解つてる、と澄み切った翠の瞳が相方に頷く。

何をする気だ――というより、さっきのアレは何だ。

橋の向こうには、街道の真ん中に垣根よろしく茂みが生えたままだ。馬はへばりつく者を乗せ、川沿いに走り去っていく。

騒ぎの所為か橋の周囲には他の旅人の姿が無かった。しかし、後々あの障害物は邪魔だろう。

思うものの、言葉が出てこない。まだ、追っ手を完全に振り切つたわけでもなかった。

丹垂が小さく口を開閉していると、ほら行くぞ、と低声が促して

きた。よろめきながら、割と年嵩らしき男の後ろ頭を見上げる。や
や量の少なめな短い黒髪に、白髪がだいぶ混じっていた。若そうな
方の父親だろうか。

肩で息をしている成もついて来て、三人で少し進む。すると後ろ
で、先程のような籠もった音が再び聞こえた。雷鳴ではない。ぼこ
ぼこと、下から何か硬い物を押し上げるような音。

目を向け、丹垂はぼかんとした。

つい今し方まで居た橋の脇に、大木が生えていた。根元に、細い
姿が片膝をついている。

太い根が、蛇のように橋の際きわをうねるのが見えた。根に下から持
ち上げられ、石材に亀裂が走る。崩壊の重い音がし始めた。

実に呆気なく、橋の一部が落ちてしまった。

若者は飛び退くように木から離れるや、腰を屈めて走って来る。

「もつと離れないと危ない。雷が近づいてる」

「雨も来るし、今の内に道を外れてしまおうか」

男の間だけで話が纏まる。

丹垂も成も、足を動かすのが精いっぱい、逆らう余力は残って
いなかった。

もう一刻もすれば日が傾く。風に強く波打ち始めた草を分け、四
人は街道を逸れていった。

森に囲まれた王国は、深閑とした夜の中にあった。

明かりの少ない王の居室に、しずしずと二妃が入る。入れ替わりに、近侍達が退室した。

窓辺の瀟洒な長椅子に、王はもたれていた。招くように腕を上げる。

陛下、と不安げな声音を洩らし、二妃は夫の隣に浅く腰を下ろした。王はやつれの消えていない顔つきで、妃の手を取る。

「末呉羅は」

低く穏やかな声が問うと、大丈夫です、と己にも言い聞かせるように二妃は応じた。応じたものの、顔を曇らせる。

「丹亜様がお出かけと知って長いこと泣いたものですから、また少々熱が出ました」

そうか、と王は倍以上年若い妻の纖手に目を落とす。二妃はもう一方の手を重ねた。「丹亜様は御無事で？」

「……十人連れている。亭柄師が南東の関より見送ったらしいが……旅費が僅か故、月区以外を指すやもと、直前になって丹亜はどうも惑ったようだ……」

そこまで言って、王は咳をする。二妃は夫の上着の前を合わせ直した。するに任せて、王は言を継ぐ。「下手に道をたがえぬ前にと、知古嵯が迎えの隊を出したと言っていた。ほどなく戻ろう」

王弟の名に、二妃は双眸を揺らした。

「末呉羅は、丹亜様と一緒に教えていただくのだと楽しみにしておりました。亭柄様は御高齢でもあります。此度のこと、お許しただくわけには参りませぬか……？」

王は訝しげに眉を寄せた。

「許すものもない。亭柄師は確かに丹亜を送り出してしまったかもしれないが、それを言い出せばきりがない。そもそも最初に王女付

き以外の随行も付けず、城外での薬草摘みを許可したのは知古嵯だ。わたしも執務にかまけて事後承諾してしまったし、丹垂自身の置手紙もあった」

聞くうち、二妃は顔色が一段と悪くなった。

「亭柄様は此度の責を負い、北の塔にて蟄居の沙汰がくだったと、聞き及んでおりました」

「誰から」

声は穏やかなままだったが、王の眼光は鋭くなっていた。二妃が微かに震える声を出す。

「宰相閣下の、御令室から……」

十九歳の王弟妃は赤子を乳母に任せ、宰相の妻として精力的に茶会を開いている。国内の高位女性を束ねる役を、自らに任じているらしかった。

軽く二妃の手を押さえると、王は椅子から立ち上がった。廊下への扉に向かいながら、側近の名を呼ぶ。

薄く扉を開け、王はティエの所在を問うた。意を受けた側近が廊下を足早に去る。

扉を閉じ、完治に至っていない王は二妃の元へ戻った。長めの上着の裾が、ゆらりと彷徨う。

「しばらく、末呉羅の具合を理由に宰相達との関わりを断て」

青ざめた二妃は、王の腕の中で黙って頷いた。

丹垂は、ハッと瞼を上げた。

薄暗く低い布天井に向かい、幾本もの細い梁が大きく円を描いている。見慣れない光景の筈だったが、とても記憶に残っている天井だった。

梁と柱が交差している所からは、太めの紐が垂れている。

わけも解らず、とにかくソレにしがみついたのを思い出した。自分だけでなく、他の者達も。

『リ・コウーっ』

皆で、運命を司る風の男神の名を叫んだ。叫びながら、この天井を見上げたのだ。

街道を大きく外れ、草の薄まった場所に白く円い小屋を見つけた頃には、いつ雨が降り出してもおかしくない空模様になっていた。

更に風が、やけに強く吹き渡っていた。

連れの男二人が歩調を緩めて近づくと、小屋の脇から犬が二匹走り出てきて吠えたてた。

吠え声で、そこだけが木造りの戸が開き、小柄な中年女性が出てきた。連れの年上の方が、嵐が過ぎるまで泊めてくれないかと丁寧に頼むと、女性はあっさり諒承してくれた。

ホッとしたのも束の間で、小屋に入るや風が尋常じゃなくなった。小屋は組み柵のような物と頼りなげな二本の柱だけで支えられていたが、それらがミシミシと音を立て始めたのだ。

掴まって！ と女性が大声をあげ、小屋に居た幼子二人が天井から下がった紐に飛びついた。連れの二人も迷わず空いた紐に取りつき、立ち尽くしている丹亜と成に怒鳴った。早くしろッ、と。

ビョホーッと、雷に負けない轟音と共に、暴風が吹き抜けていくのが判った。

全員で風神に祈り続けるうち、雨音が聞こえ始め、風は治まっていった。

布の家なのに、雨漏りは無かった。床下に少し水が染みているようだったけれど、初めから絨毯の下に簀の子のような物が敷いてあるらしく、問題は無かった。

お蔭で飛ばされずに済んだ、と女性が嬉しそうに言い、しばらくして慌てたように帰ってきた家主の男性とその息子からも大いに感謝された。

そうして、歓迎の宴のようなモノが始まった。

中央の炉を囲んで並んだ料理は、見たことの無い物ばかりだった。

何なのかさえ判らない薄黄色く柔らかめの塊。炙った平たい何かの肉。白い饅頭。白くべちゃべちゃした粥のような半液体。

毒味の必要も無い湯気の上る品々だったが、小屋には生臭さがたち込めていた。空腹なのに、丹亜はなかなか食べ進められなかった。なんとか完食できそうな饅頭を我慢して口に運んでいると、幼い娘子から、椀に注がれた乳白色の汁物を渡された。にこにこしてはい、と出され、丹亜は引きつらないように留意しながら受け取った。

意外にも、鼻先を爽やかな柑橘系の香がよぎった。それまで鼻腔を脅かしていた臭いが臭いだったので、丹亜は思わず、ぐいっと飲んでしまった。

生ぬるい液体が喉を過ぎゆき、胃に達したと思う間に、得体の知れない熱が駆け昇ってきた――

瞬きと共に事々が蘇り、丹亜は飛び起きた。ズキンと頭が痛む。

丹亜の代わりに、間近で小さな呻き声^{なる}がした。頭をさすりながら見れば、どうも成^{なる}が隣に横たわっていたらしい。同い年の侍女は寝返りを打ち、大人しくなる。

丹亜はゆっくりと、視線を巡らした。

まだ夜の只中か。屋内が薄暗いのは、炉の残り火の所為らしい。小屋は炉を境にして二分されていた。食事の時には無かった仕切が置かれている。今いるのは、入口から向かって右側の奥だ。仕切の向こうから聞こえるのは、いびきというヤツだろうか。

それなりの部屋に一人で寝たことしかなかったから、奇妙な気分だった。各自のたてる深い呼吸音が落ち着かない。

掛けられていた布を剥ぐと、丹亜はそろりと立ち上がった。身体のあちこちが、軋んだ。

温かい炉の前にしゃがみ込んで手をかざす。

少々冷えていた掌から、温もりが身体中に広がっていく。息を一つついた時、ひそめて掠れた声^{こもり}がした。

「具合は平気か？」

びくりと目をやれば、白髪混じりの黒い頭が、のそりと這って来ていた。宴の段になって互いに名乗り合い、彼はネンジ・スーと言っていた。若い方はヒコ・スー。同じ姓だが、血の繋がりは無いらしい。

ネンジは炉を挟んで向かいに胡坐をかくと、丹亜と同じように手をかざした。

頭がズキズキする、と丹亜が告げると、ネンジは声を出さずに笑った。奥歯が一本、無いようだ。

「嬢ちゃんは酒に強くなさそうだ」

「あれは、酒だったのか」

「草原の連中にとっちゃ、水の代わりだけどな」

「……わたくしは、倒れたのか」

「そそ。後ろにばったーんと」

羞恥が湧き起ると、頭痛が酷くなった。こめかみで脈打つのが判る。丹亜は声量を更に落として、ぼそぼそと言った。

「又、迷惑をかけてしまったのだな……すまない」

「俺あ、別に？ 成が大袈裟に騒いでたけどな」

問いかけの目を投げると、ネンジは瞳を少し上向けた。青みがかった黒眼が、思い返すように細まる。「ワクさんが寢床に運んでやろうとしたら、自分がやると言い出して――正体失った人間ってのは重いんだよな。よろよろして、色々引っくり返して、結局ワクさんが手を貸したんだけど、悔しかったのかべそべそ泣き出して」
たった一人になってしまった侍女としては、主の世話^{あるじ}を他者にさせたくなかったのだろう。急に倒れてしまって心配もしたに違いない。

そうか、と呟くように言って、丹亜は炉で赤く燻ぶる燃料を見つめる。

炉の向こうでは、ネンジがじろじろとこちらを眺めていた。不躰な視線に、丹亜は炉の火から目を上げる。

父よりも年上に見えるが、男に貫録は無かった。面白がっているような目つきをして、口の片端で笑む。

「嬢ちゃん、何処へ行く気なんだ」

逡巡の後、丹亜は正直に答えた。

「月区へ。だがその前に、この地区の皇領府——南北どちらかへ行かねばならぬ」

ネンジは薄い唇を歪めた。

「ここからなら南だろう。橋を弁償しに行くとか言うんじゃないだろうな」

「それは貴公の連れがしたこと。わたくしがあがなう義理は無い」
卑怯を承知で丹亜は断言した。あの破壊の弁済を負わされては、旅を続けられなくなる。助けてくれたことは別問題にしたい。

皇領府には、見捨てることになってしまった他の近侍達の、安否を確かめに行きたかった。信用のおける配達人を雇い、こちらの無事も国に知らせておきたい。併せて、旅を続けるつもりだとの意思表示も。

肩をすくめるようにして、ネンジは胡坐をかいた両膝に手を置いた。

「何にせよ、安易な皇領府入りはお勧めしねえな。嬢ちゃんを追ってた連中も向かいそうだし」

あり得そうだった。丹亜は言葉に詰まって下唇を噛む。

膝頭をぽりぽりと搔いてから、ネンジは懷から何か摘まみ出した。
「まあ、弁償については、いざとなったらコレで勘弁してほしいわな。足しにはなるよなあ？」

丹亜は目を見張り、己が服の帯の合間に手を突っ込んだ。無い。
一気に頭から血の気が引いて、懷を探る。こちらは、あった。

懷に手を入れたまま脱力した丹亜の向かいで、ネンジは指先で摘まんだ指輪をゆらゆらさせた。

「色々と金目の物を持ってたようだな。嬢ちゃんが馬車から転がり出た時に、散らばったのが判ったぜ。俺あ、コレ一個だけ拾えたん

だが」

ふた月は遊んで暮らせそうだ。ネンジはそう続けてニヤニヤする。丹亜は唇を噛み締めた。目利きの少ない地で換金するのは損だと思ひ、一部しか売却しなかったことが裏目に出ってしまった。硬貨の入った財布と、ティエから預かった封書や寸志は懷に残っている。が、それ以外の装飾品は……

ネンジの手にあるのは、丹亜が十歳の祝いに貰った物だ。金細工で真紅の宝石が嵌まっているから、そこそこの値にはなると思っていた。装飾品に興味が無くて、正確な価値は全く判っていなかったが。

返してくれと頼んでも、目の前の男相手では無駄に思える。

溜め息まじりに、丹亜は言った。

「貴公らに助けられたのは事実だ。せいぜい高く買い取ってもらうがいい」

骨張った小指の先に輪をねじ込んで、ネンジは目を眇めた。

「下手したら死んでたコトの対価にしては、安くないか？」

頭痛が酷くなって己の苛立ちを自覚する。丹亜は努めて表情を消した。

「わたくしが財産を落としたところを見たのだろう？ 残っているのは師から預かっている手紙と薬代だけだ。貴公ら、結果的に死にはしなかったのだから、ソレで妥協してもらうしかない」

あからさまに、ネンジは当てが外れたような顔になった。

「おいおい、そんなでよくまあ月区くんだりまで行くなんて言えるな。この先の旅費はどうするつもりだ」

ぐ、と丹亜はぐもった声を洩らしてしまった。

残った硬貨だけでは、恐らく、成と二人分で済むとしても足りない。往復で、まだ殆ど半年かかる旅程だ。

丹亜の反応に、本物の路頭迷いか、とネンジは唸った。

「ったく、ヒコの奴、厄介に首突っ込みやがって……」

ぶつぶつと言って、ネンジは白髪混じりの頭を掻いた。「これで

見捨てたら、命の恩人である筈の俺達が、人でなしみたいになっちゃうよなあ」

いちいち恩をチラつかせる台詞に頭痛が増す。しかしながら、もう放っておいていい、と言ってしまふのは拙いと悟っていた。

丹亜は皇領を、ティエの講義上でしか知らない。草原の中で、このような布小屋に住む人々が居るなど、初めて知ったくらいだ。

取り敢えず見捨てはしないようなので、丹亜は姿勢を正すと黙ってネンジに頭を下げる。一国の王女として、譲歩できる限界だった。

布小屋は幕家ユルトと言うらしい。

簡単に解体できるそうだ。天候や草の生え具合に合わせ、家畜と共に、度々移動する為に。

丹亜にあが宴の折に嗅ぎ取った生臭さは、家の周りに囲われていた牛、馬、羊の所為だった。雨が降った所為で、湿って籠もった臭いが入り込んだようだ。

普段は、乾燥気味の草原で、家畜の臭いはそれほど気にならない。四日目ともなると、丹亜は慣れてしまった。

生まれは田舎だと言っていた成なるの方が、種々の順応に手間取っていた。

この状況下でも侍女として振る舞おうとしているのか、丹亜の傍に控え、あまり口をきこうとしない。けれど、表情が如実に心情を示していることが多かった。

今朝も借りた櫛で丹亜の髪を梳くが、銅鏡に映った顔は小さく口を曲げている。

草原に入ってから以降、二人とも髪を洗えず、結ってから同じ飾り紐を使うしかない。それが成には不服らしかった。

成は当初、ネンジ達と同行するのは反対だと主張した。月区げっくに行くなら街道に戻りましょう、と。街道に戻ればきちんとした宿にも泊まれるし、女性二人でもなんとかなると思っただろう。だが、丹亜が懐具合を説明すると、肩を落として褐色の瞳を潤ませた。

『亭柄ていへ様の包みを、わたしが持てば良かったのですね』

ティエが薬代を包んでくれたのは、例の潜り蛙をくるんでいた布だった。侍女達は触れたがらず、己の浅はかさへの戒めも込め、丹亜が懐へ入れたのだ。それまで肌身離さずだった、装飾品の包みの代わりに。

大きな代償となってしまうた。

頼りがネンジ達しか居ないと理解した時の顔つきで、成は櫛を銅鏡の脇に置いた。綺麗に編み込んだ髪を結い上げてくれたのに、物憂げに息をつく。

五人家族に四人もの客が加わって賑やかな家の中、辛うじて丹亜だけが聞き取れる小声で成は愚痴ってきた。

「わたし達、いつまでここに居るんでしょう」

「そろそろ発たねばな。長居は迷惑だろうし」

一家は嫌な顔一つ見せずに滞在させてくれているけれど。それはたまたま、突風から家を守ったからだろう。

他に、人の好い一家では、追い出すに追い出せなかったと思われる件があった。

ヒコが、二日間も目覚めなかったのだ。

ネンジは恐縮しつつも、居心地イイとこうなっちまうみたいでね、と一家にへらへらと言いついていた。

本当のところは、植物を操る力を使った反動らしい。

三日前、夕日に染め上げられた草地に立ち、ネンジは苦笑して言った。

『あいつあ、？緑の手？なんだ』

ルウの民みたいなのではないのか、と問うた返事がソレで。

何だそれは、と丹亜が問を重ねると、とりとめなくネンジは続けた。

『ルウの民も変な術を色々を使うが、ヒコは術と言うより……手が、もう生まれつき、そうなんだよ』

ちよっと草生やして花咲かせるくらいなら、翌朝ほんの少し寝坊する程度なだけだな、と、ネンジは肩をすくめた。『精霊級から遠ざかれば、力使う度に爆睡しねえんじゃないのって言ってるんだけどなあ』

な——と丹亜は小さく口を開けた。

『旅などさせて大丈夫なのか。精霊級と呼ばれる人は——』

稀な人。純粹の存在ゆえ身体が脆く、この世では生まれても短命。そう巻物で読んだことがあった。

元氣そうに見えたが、彼はもう長くないのか。

何故か異母弟が思い出されて黙った丹亜を、ネンジは横目で見た。『精靈級には二種類あるそうだぜ。人に近いのと精靈に近いの。精靈に近い方は十まで生きるのがやつとらしいが、ヒコはもう十七になる。人に近い方なんだな。まあ、無理しなきゃ長生きできるのさ』誰でもそうだろうけどな、とネンジは無精鬚の伸びた顎を撫でた。そうして、つと顔をしかめると言い当ててきた。

『やっぱり嬢ちゃん、相当いいトコの子供だなあ』

『……何故……何か問題があるのか』

『精靈級を知ってる奴なんて、そう居ねえ。そんな名称があると知ってるってえのは、学問とやらを修めてないとな』

読み書きも完璧だろ、と半眼を閉じてネンジは口を歪めた。

公用語だけは、と丹亜が濁すと、成は、と確認するように尋ねられた。読みは恐らく、と離れた場所で幼子達を構っている姿を振り返れば、ふふんとネンジは鼻で笑った。

『つまり、嬢ちゃん達を売り払えば、ひと財産になる』

背中に雨を浴びた錯覚に襲われた横で、街道に戻るのも善し悪しだなあ、とネンジは迷うように言っていた。

乳製品主体の簡素な朝食が済むと、ネンジが丹亜と成を外に手招いた。

一緒に出たヒコは、ワクとその息子の後について、馬が囲われた方へ歩いて行く。昨日ようやく目覚めた際はふらついていたらけれど、今日は健康そのものといった風情だ。

後ろ姿は、緑がかった短い黒髪、普通の少年でしかない。マレビトには、とても見えなかった。

ネンジは精靈級の話をした付近まで歩き、足を止めた。肩越しに振り返りながら訊いてくる。

「馬に乗ったことは？」

「平らな場所であれば、少し走れると思う」

おてんばだった頃の経験だ。丹亜が自信無く答えれば、成は口を横一文字に結んで首を振るだけだった。

まー、じゃあ、とネンジは頭を掻きつつ言った。

「嬢ちゃんは俺と。成はヒコと乗れ」

馬車は、と成がか細い声を出す。ネンジは幕家を指差した。「余分な馬車なんてあると思うか？」

項垂れる侍女の隣で、丹亜は四日前に歩いてきた方角を見た。

「街道に戻らないんだな」

「しばらくは。ワクの親戚がこの先に住んでるらしい。今日はそこを目指す」

眉を寄せ、丹亜はネンジを見上げた。

「草原の民というのは、そんなに気安く泊めてくれるのか？」

「女連れは特に。一晩くらいなら、だいたい歓迎してくれる。客は滅多に来ないから縁起モンなのさ」

「……そういうものなのか」

「皇領は街道沿い以外、住むには厳しい土地ばかりだからなあ」

呑気なネンジの言葉に、成が不可解そうに洩らした。

「なんでわざわざ、こんな所に住んでるのかしら」

可笑しそうに、ネンジは少女に目を投げた。

「自由だからじゃね？」

ああ、と丹亜は腑に落ちる。

だから、わたくしはこの数日がさして苦にならないのか。

住民税が無いしな、とネンジは現実的なことも口にしてから、しかした、と両手を腰の脇に当て、こちらを見下ろした。

「売上税は高い。よって、概ね物の値段も高めだ。草原の連中は、なるべく物々交換でしのいでる」

無言で丹亜が頷くと、ネンジは薄く笑んだ。「嬢ちゃん達の髪の毛で、大きめの鞍一式が付いた馬二頭」

一拍の後、丹亜は呆氣にとられる。成が、な、な——と、どもりながら、親ほどの男に詰め寄った。

「何を勝手に——冗談じゃないわ、なんでそうなるのよ!？」

「長い髪ってヤツあ、貴重なのさ」

しみじみと述べて、ネンジは薄くなっている己が頭頂をさする。

「特に嬢ちゃんのその色、金が混じってるよな」

丹亜はこめかみの辺りにこぼれる髪を摘まんでみる。軽く陽に透かせば金に見える茶色だった。

成が猛然と、駄目!　と言い切った。

「わたしの髪ならともかく、丹亜様の御髪を馬ごときにできますかっ」

成が一つに編んで垂らしている髪は柔らかげな狐色だ。優しい色で、丹亜としては彼女の髪の方が惜しかった。

「わたくしの髪は全て剃ってしまったて良い。わたくしの髪だけでは二頭にならぬのか」

丹亜様ッ、と成が悲鳴じみた声をあげる。丹亜は片手を上げて制止した。「わたくしの髪は伸びる。ネンジと違って」

一言余計だ、と言う低声を聞き流し、どうなのだ、と丹亜は青みがかった黒眼を見据える。

「相当切っちゃっていいなら、いい馬を選ばせてもらえるかもな」
芳しくない返答と共にネンジが小刀を手渡してきて、丹亜は黙然と受け取る。成が両手で顔を覆って泣き出した。

なかなか洗えぬ長い髪など不潔なだけではないか、と侍女を説得し、丹亜は背の中程まであった髪を襟足まで切らせた。成の髪は、夫人が切り揃えてくれた。

成が散髪されている間に、丹亜は男達を遠くから眺めていた。

四頭の馬が引いてこられ、ネンジとヒコは並んで見定めている風だった。

決まったのか、二頭が引き出される。ネンジがワクに何か渡していて、丹亜は軽くなった頭をゆるりと振った。

髪ごときで馬に換えてもらえるわけがない。

金糸のようだと幼子達がはしゃいでいるから、少しは足しになったのかもしれないが。

女性は草原で優遇されても、街道に出るとそうはいかないのか。

馬車で進んでいた時、差別を感じることは無かったけれど……

自分は何も知らないのだと、丹亜は強烈に実感していた。

大地神アカ・シの御加護がありますように、との声を背に受け、昼過ぎにワク一家の幕家を後にした。

初めて馬に乘せられた成がすっかり怯えてしまい、後ろから抱えるように手綱を取るヒコは、ゆっくりと歩ませている。

丹亜は感覚をすぐに取り戻せたので、ネンジに手綱を取られる馬は軽やかに東へ向かっていた。

先日の嵐が嘘のように、ほんのりと花の匂いを孕む微風そよかぜが吹いている。

穏やかに起伏している地上は、一面の緑だった。

ぽつぽつと木も生えているけれど、地表にはただただ若草が広がっている。

街道から外れている今は、方角が判らなくなりそうだ。

三十分程進んで、狭いせせらぎを飛び越えた。

後ろの方で、落ちる、と成が泣きそうな声をあげている。

丹亜は、ふと思いついて呟いた。

「あの橋が通れなくなって、他の旅人は足止めを食ったのだろうか……」

人それぞれだ、とネンジが応じた。

近くで治るまで待つ者も居るだろうし、木橋を通って街道に戻る者も居る、と付け足してくる。

川には石橋の他、流れの緩い場所に、木橋が何箇所か架かっていると言うことだった。

やや安堵した丹亜の背で、ネンジは呆れたように評した。

「まったく、変わった嬢ちゃんだな」

「……自分ではそう思わない」

「そりゃそうだ」

笑うネンジのごつい身体越しに、丹亜は後方を窺った。慎重にヒコが馬を操って、二頭の間がだいぶ離れている。

鞍の前を掴んで身を捻り、丹亜はネンジの目を見た。

「髪も、変わっていたとは思っていなかった」

丹亜の毛色は少し金がかっていたものの、ワクの一家も全員茶系の髪だった。大した違いは無かったのだ。むしろあの家で目立っていたのは、艶やかなヒコの黒髪だった。

ネンジが大きく鼻で息をついた。僅かに馬腹を蹴る気配がして、馬の歩みが速まる。

丹亜は上体が揺らいだ。焦って前に向き直り、鞍を挟む足に力を入れ、唇を噛む。

背中に、低声が響いた。

「長髪が小金になるのは嘘じゃねえ——好都合だったのさ。庶民の女ってのは、毎日他人に髪を梳かせねえ。特別な日でもないのに、凝って結ったり柄紐を絡めたりしねえ」

この状況で、自分でしたことがないのだと告げるのは、恥ずかしいことだと思えてしまった。

振り仰ぐことも叶わず、丹亜は鞍の前を両手で握り締める。ネンジは更に速度を上げさせつつ、口早に言を継いだ。

「税の話にしても、成は解ったフリして目は、はあ？　ってなったのに、嬢ちゃんはしっかり理解してやがる。そこの女ってのは、成みtainな反応するのが大多数だ。極めつけに、馬——俺あ、相乗りの経験を聞いたつもりだったのに——草原の連中だって、女一人で乗りこなせるのは少数だぞ」

「この体たらくで、乗りこなせているとは、思えぬ」

やっと言い返すと、だからあ、とネンジは腹立たしげに言い募っ

た。

「そのお上品な喋り方もなんとかしろ！ 教養も隠し通せっ。今の状態じゃ、？お買い得？って宣伝して歩いてるようなものだ——街道に戻れねえんだって」

ようやく合点し、合点するや、丹垂はムカムカした。鞍を一つ叩く。

なにゆえ
「何故、さっさと言わなかったのだっ」

「ああ？ 何度も言ったぞ。だいたい気づけよ、お利口なんだろうが」

「知識の豊富と知恵が回るは別モノだ、わたくしは前者にすぎぬっ」
「威張るな！」

「そちこそ！」

不毛になっていった言い合いは、離れ過ぎ、とヒコが指笛を鳴らすまで続いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3184ba/>

そして夜明け

2012年1月13日07時46分発行